

外国語科の特質に応じた深い学びについて

濱 崎 孔一廊 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

山 下 守 [鹿児島市立清水小学校]

阿久根 崇 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

金 崎 英 俊 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

On the Deeper Level of English Learning at Elementary School

HAMASAKI Ko-ichiro · YAMASHITA Mamoru · AKUNE Takashi · KANESAKI Hidetoshi

キーワード： 小学校外国語科，英語のコミュニケーション活動，深い学び，言語と文化の多様性，学びの過程

1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂に伴い，2年間の移行期間を経て，従来小学校の高学年で行われてきた外国語活動が平成32年度からは中学年で行われることになり，高学年では外国語科が導入されることになった。文部科学省(2016)にあるように，今回の学習指導要領改訂の方向性は，「何を学ぶか」，「どのように学ぶか」，「何ができるようになるか」という言葉で端的に示されている。

「何を学ぶか」という点から新しい時代に必要とされる資質・能力を踏まえ，小学校での外国語教育の教科化がなされ，「どのように学ぶか」という観点からは「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の視点を取り入れられている。新科目が導入されることにより，従来の科目がおろそかになってはならず，各学校でカリキュラム・マネジメントを効果的に実施し，「情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも，未来の創り手となるための知識や力を確実に備えることのできる学校教育」¹の実現が求められている。

新学習指導要領の要となる深い学びについて，田村(2017: 22)は，『『深い学び』の実現のためには，身に付けた知識や技能を発揮したり，活用したりして関連付けることが大切になる』と記している。ここでの「身に付けた知識や技能」は「それまでに学んだことや各教科等で身に付けた知識や技能」とされている。しかし，小学校の外国語科の場合，初めて学ぶ教科であるため，可能性としては外国語活動で得たものとなる。ところが，外国語活動の目標は，「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」とあるように，慣れ親しむ活動の中では一定の知識や技能を得ることが求められていないようにみえる。一方，他教科等からは，さまざまな知識や技能を身に付けてはいても，外国語を使ってそれらを活用することが果たして可能なのかは問題になるであろう。実際，田村(2017: 37)で例示されている各教科等に基づいた年間の単元配列表に外国語科は入っていない。そこで，本論では，小学校における外国語科の深い学びの本質を外国語習得・学習の特

¹ 文部科学省(2016)のスライド8を参照。

質を基に明らかにし、実践の方法を提案することを目的とする。

2. 外国語活動と外国語科の接続

2.1. コミュニケーション能力

外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ということであった。高学年において学ぶ外国語科と中学年でを行う外国語活動の間につながりがあるべきなのは言を俟たない。しかし、問題は、外国語科で活用したり関連付けたりできる何らかの知識や技能が外国語活動の中で得られているのかということである。

一般的に言って、たいていの知識や技能は意図的に身に付けるものであるのに対して、言語の習得は意図的になされるのではなく、成長の過程で自然に無意識になされるものである。母語の習得と第二言語習得²には違いがあるのは当然であるが、言語の習得過程に類似点は多い。したがって、他教科等で学ぶ知識や技能とは異なったとしても活用できるものはあるはずである。それは、学習指導要領にもある「コミュニケーション能力の素地」と言えよう。

2.2. コミュニケーション能力の4要素

「コミュニケーション能力」とはいかなるものであろうか。この概念が出てきた過程を辿ることで、その内容を明らかにしていきたい。もともとは、アメリカの言語学者 Chomsky が提唱した「言語能力 (Competence)」と「言語運用 (Performance)」³ という概念が基になっている。Chomsky は、現代のさまざまな言語理論、あるいはそれらに基づく応用言語学の発展をもたらす契機となった生成文法 (Generative Grammar) 理論の提唱者である。属する文化・民族・国家が違って、人間は、環境さえ整えばいかなる言語も同じような過程を経て習得可能であることから、人間という種に固有で、かつ、あらゆる人間言語の根底にあるとされる普遍文法 (UG: Universal Grammar) を追求するという目標を立て、言語の科学的研究方法の確立を目指した。しかし、しっかりと言語能力を確立した言語話者であっても、実際に運用される言語は、さまざまな要因によって、脳内に確立された言語能力を正確に反映したものとはならない。科学では、あらゆる現象の背後にある一般的な原理や規則を見つけ出そうとする。その原理や規則に普遍性があれば、いついかなる環境の基でも同じ現象を再現できるはずだが、たとえば、物理現象などでもいついかなるときでも同一の環境を再現することは不可能である。したがって、無視して構わないとされる要因は捨象し、理想状態での原理・規則を打ち立てる。Chomsky の目指す対象も、このような理想的な言語能力の方であった。

ところが、実際の言語教育にあたっては、学習者の言語運用を扱わざるを得ない。Chomsky の追求する言語能力は、言語教育に応用するにはあまりにも抽象的で使いにくいということで、Hymes (1972) や Canale and Swain (1980) 等は「コミュニケーション能力 (Communicative Competence)」という概念を提唱してきた。特に、Canale and Swain (1980) ではコミュニケーション能力を構成する要素として次の4つの概念を提示している。すなわち、「文法的能力 (Grammatical Competence)」、「社会言語的能力 (Sociolinguistic Competence)」、「談話能力 (Discourse Competence)」、「方

² 「第二言語」と「外国語」は同じではないが、一般的な日本人の外国語学習においては両者の区別はさほど問題にならないので、この2つの用語は区別を付けず同列に扱うこととする。

³ この2つの概念については、Chomsky (1965, 1986) を参照されたい。

略的能力 (Strategic Competence)」である。

Canale and Swain (1980) に基づくと、文法的能力とは「言語のしくみを体得し、その言語の語彙 (単語) や語形態、語順、音の特徴を十分認識した上で、これらの特徴を活かして適切な表現 (語句や文等) を作り出すことができる能力」であり、社会言語的能力とは「言語がどのような社会の場面で用いられるのかをしっかりと理解した上で、コミュニケーションへの参与者 (つまり、話し手と聞き手) の役割 (情報を伝達する、情報をもらう、依頼をする、命令する、許可を求める、要求するなどの行為をする側、あるいはされる側の社会的関係等)、参与者間ですでに共有している情報、コミュニケーション活動を通して相互にやりとりするときのそれぞれの機能等を言語の運用上適切に使いこなすことができる能力」、談話能力は「個々の文を個別に切り離して捉えるのではなく、複数の文や発話が結びついて、特定の文脈の中で1つの大きな意味のまとまりを形成しているということを理解できる能力」、方略的能力は「言語を完璧に作り出すことができない状況に陥っても、(顔の表情や、視線、身振り、手振り、図示、相手との距離のとり方等さまざまな言語外の) 別的手段を用いて何とか相手と意志を通じ合わせることができる能力」を言う。

これらの4つの能力のうち、文法的能力・社会言語的能力・談話能力の3つは言語コミュニケーション (verbal communication) に大きく関わる高度な能力になるので、小学校における外国語科や外国語科活動では、かなり限定的かつ簡素なものになる。それゆえ、小学校の外国語活動で身に付けることを一番に目指すのは方略的能力といえよう。方略的能力は非言語コミュニケーションに大きく依存するので、複雑な言語体系の理解が不十分でも活用可能な能力なのである。

しかし、外国語活動のレベルであっても、文法的能力・社会言語的能力・談話能力がまったく発揮されないわけではない。単語レベルの発話であっても、音に慣れ親しむ中で音韻構造を少しずつ身に付けてくるはずであるし、ましてや、複数の語句を用いるとそこには文法上の操作が関与してくるので、文法的能力も少しは身に付いてくるはずである。⁴ また、買い物ごつこのようなスキット等で、Apples, please. というように please を付け加えることで丁寧さが加わることから、社会的な場面や立場を意識した能力もある程度は身に付いてくると考えられる。さらに、相手の発話に対して、うなずいたり応答したりすることも、談話を形成することにつながるし、自らの発話を2つ以上形成することができれば、これも談話能力の形成につながると考えられるからである。

2.3. 相互文化的コミュニケーション能力

これまで、小学校で新たに導入される外国語科で深い学びを実現するためには、まず外国語活動で培った資質や能力⁵を活用することだということ、そのことによって、外国語活動と外国語科とがコミュニケーション能力を軸に結びつくべきものであることを論じてきた。一方で、外国語科の前に経験する外国語活動の内容の中心になるのはコミュニケーション能力だけではなく、「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める」ということが挙げられている。そこで、ここでは言語と文化との関係について論じることとする。

現行の学習指導要領にもある通り、文化というと「生活、習慣、行事」などを一般に思い浮かべがちである。しかし、

⁴ ただし、外国語活動では慣れ親しむことが中心なので、どれだけ身に付けたかは問題にしないし、数値的な評価も行わない。

⁵ 深い学びで活用する知識や技能は「それまでに学んだことや各教科等で身に付けた知識や技能」であったが、同時にそれは各教科等の特性に応じたものとなるべきである。したがって、ここでは、「知識や技能」というより「資質や能力」という方が外国語科の特質、特にコミュニケーション能力の本質に沿ったものだと考える。

文化は言語の構造やコミュニケーション能力とも大きく関わっていることを明らかにし、中学校以降の外国語教育との接続も視野に入れた上で小学校での外国語科を考える必要性について論じていく。

まず、コミュニケーション能力と文化との関係の方から始める。先の議論から明かなように、コミュニケーション能力は、人間という種に固有の普遍的な言語能力の追求を批判することで生じてきた概念である。しかし、Byram (1997, 2008) や Byram et al. (2001) 等では、「相互文化的コミュニケーション能力」⁶ という概念が提唱されている。Byram (2008: 177) は、民族、社会階層、宗教、性別、年齢等の異なるさまざまな社会のグループが互いに理解し合うことによって、互いの結びつきを高めるような働きを言語教育は果たし、その一方で、さまざまな言語や文化を背景にもつ人たちと積極的に関わっていける相互文化的市民を形成するような教育を目指すべきだと主張している。これは従来のコミュニケーション能力を一歩進めた考え方だと言えよう。従来の「異文化理解」は、いわば「何を学ぶか」ということであり、そのために「どのように学ぶか」ということが問題とされ、方略的能力の育成その他の指導法の具体化が追求されてきた。しかし、新学習指導要領にあるように、「何ができるようになるか」ということのヒントが、この Byram の「相互文化的コミュニケーション能力」という ICC (Intercultural Communicative Competence) 理論の中に見出されるように思われる。ICC 理論に基づく、新学習指導要領で求められている「新しい時代に必要な資質・能力」として、外国語教育が単に外国語のコミュニケーション能力を磨くことだけにとどまらず、さまざまな文化を背景にした価値観や認識を受け入れ、異なる視点をもつ人々の仲介者になり、多様な文化を背景にもつ人々と積極的に交流できる能力を育成するという、より明確な目標が見えてこよう。

3. 学びの過程の構造化と体系化

3.1. 深い学び

新学習指導要領にたびたび出てくる「深い学び」とは、どのようなものであろうか。小学校の外国語科における「深い学び」とは具体的にどのようなものと考えべきなのだろうか。言葉とは、これを使って他者とコミュニケーションを図る手段である。日本語であれば、ある程度複雑な内容も伝え合うことは可能であるが、外国語を通して、しかも、異なる文化を背景にもつ人たちと、深い内容の伝達など土台無理であろう。であるならば、「深い学び」とは何かをより明確にし、その上で小学校の外国語科における「深い学び」の具体化を図るべきであろう。

田村 (2017: 23) では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」が個別バラバラではなく、一体となるべきだと主張されている。さらに続けて「深い学び」とは「子供たちが習得・活用・探求を視野に入れた各教科等固有の学習過程の中で、それまでに身に付けていた資質・能力を存分に活用・発揮し、その結果、資質・能力が様々な関連付いたり、組み合わせざったりして構造化されていくこと」とされている (田村 (2017: 24))。ここでまず注目したいのは「構造化」という言葉である。「構造」という訳語が当てられている英語の *structure* の説明⁷ をウェブ上の Collins English Dictionary で見てみよう。

⁶ Byram は Intercultural Communicative Competence と称し、これは「異文化間コミュニケーション能力」と訳されることもあるが、「異文化」という捉え方は、自分の文化を中心にして他の文化を見るという意識があるように思われる。これからの社会に生きる人たちは、それぞれの属する国・宗教・民族・文化等の枠を超えた地球市民 (global citizen) であるとみなすなら、自らのアイデンティティを大事にしつつも共存する他者を尊重し、相互に交わるという意味を込めて「相互文化的」という表現を採用した。

⁷ ここでは、本議論に関係する説明だけを引用している。範疇 (品詞) や例文等も省いてある。

(1) structure

- (a) The structure of something is the way in which it is made, built, or organized.
- (b) A structure is something that consists of parts connected together in an ordered way.
- (c) If you structure something, you arrange it in a careful, organized pattern or system.

これらをまとめると、構造とは、複数の部分が有機的に結合し、体系化されたものであると言える。Saussure は、構造をチェスに喩えている。チェスの駒と駒とが衝突するとき、表面だけ見ていると駒の衝突部分だけしか問題にならないように見えるかもしれないが、達人になると陣形全体が有機的につながっていることが見えるので、全く違う部分の駒を動かしたりする。つまり、表面の奥深くに互いに結びついて連動している有機体が存在するということである。これは一つの体系 (system) をもつということもできる。人体も、循環器系、神経系、消化器系等、表面からは見えない奥の方で全体がつながっていて互いに影響を及ぼし合っている。それゆえ、表面的に痛みが出ていても、その根本的治療のためには、表面上の対症療法ではなく、内部の構造を意識して原因のおおもとを探らなければならない。教育の場合も同じである。教える側からみたら一つの教科かもしれないが、子どもたちにしてみれば、多くの教科等の一つにすぎない。したがって、単一の教科の視点だけから考えるのではなく、カリキュラム全体を統括するカリキュラム・マネジメントが必要になってくるのである。

言葉は、日常の活動や属する社会と密接な関係がある。たとえば、テレビという言葉は、これがない社会や時代には必要とされないであろう。子どもたちの活動する場は、家庭やそれを取り巻く地域、そして多くの時間を過ごす学校である。したがって、他教科等で学んだ内容を子どもたちに無理のない程度に取り入れることは、深い学びにつながるのである。

また、小学校での学びは、その後の中学校以降の学びへとつながるものでなければならない。小学校・中学校・高校や大学等、あるいはその後活躍する社会と連動し、学ぶ内容が構造化され、体系化されなければならない。ところが、このような視点が欠如していると、外国語活動でせつかく外国語（たとえば、英語）のリズムに慣れてきたのに、教科書による文字の導入の際に、せつかくなじんだリズムをリセットしてしまうことがよく見受けられる。英語は日本語と違って、語と語の間にスペースがある。したがって、文字を目にすると、スペースで区切られたところで区切って発音しがちになる。しかし、実際の英語の音韻上のリズムは、形態上に現れた形式とは異なることが普通である。

3.2 言語における形式と意味

前節において、深い学びの構造という側面に焦点をあてて議論してきた。そこで、今度は「各教科等固有の学習過程」(田村 (2017: 23)) の方の検討に入る。上で述べたように、言語、特に母語の習得は他の技能（鉄棒、水泳、一輪車乗り等）と異なり、成長の過程で自然に無意識のうちになされるものである。ところが、第二言語の場合、いったん母語をある程度確立したところで行うので、どうしても通常の言語習得と同じようにはいかない。教科として学ぶのであれば、やはりある程度意識的な学習が必要になってくるであろう。小学生でも、低学年だと感覚的な右脳の方が優勢に働くので、論理的な処理より感覚的な体験が有効になると予想される。しかし、高学年になると次第に論理的処理を行う左脳の働きが強くなるので、このような脳の働きも考慮に入れなくてはならない。さらに付け加えると、第二言語習得理論は大いに役に立つが、その理論の多くは同族言語である欧米での言語に基づいている。しかし、日本語話者がたとえば、英語のような言語を習得する際には、別の要因が関係してくることから、

欧米で発達した第二言語習得理論を活用するときには、注意が必要である。

たとえば、英語のアルファベットは、表音文字であり、日本語で使われる表意文字とは大きく異なる。これは、語形態の違いにとどまらず、リズムや意味その他多くの側面に反映される。これも、表面的な現象しか見えていないと、見過ごしがちなところで、体系的に捉える視点が重要である。

言語は、大きく分けると形式と意味とに分けられる。前者は、語形態や文構造だけでなく、音声も含む。これらは、いずれも形式をもっているので、計測したりすることが可能である。ところが後者の意味の方は形が見えず、その実態がつかみにくいものである。コミュニケーション・アプローチでは、形式よりも意味を重視するので、どのようにしっかりと文が作れるかと、綴りに間違いがないかということより、伝えたい内容、すなわち意味の伝達の方が重視される。

最近の言語研究では、音韻構造や形態構造、文構造、意味構造それぞれの解明が進み、学習する内容や言語材料、文法項目等も構造化して体系的に学んでいけるようにすることが必要である。⁸

4. 学習指導の実際

本節では、以上のような考え方に基づいて、鹿児島大学教育学部附属小学校で行った実践を基に考察する。外国語科の特質に応じた深い学びを実現するために、「自分のことを伝えたい」「相手のことを知りたい」と、コミュニケーションへの意欲を喚起することが必要である。また、目的の達成に向けた、子どもの学びの過程を充実させることが必要である。そこで、第6学年 *What can you do?* (何ができる? ぼく、私の特技 (6/8時)) の学習を行った。

(1) コミュニケーションへの意欲を喚起する学習内容の設定

本単元では、コミュニケーションの話題や相手・目的の設定を工夫した。まず、話題の設定にあたっては、日頃の生活の中で、子どもが互いの特技に関心をもっていることを踏まえ、「互いの特技」に設定した。また、相手・目的について、互いの理解を深め合うために、友だちや ALT, JTE に加え、台北教育大学実習生とのインターネットを用いて伝え合う活動を設定することとした。

(2) 学びの過程を充実するための効果的な働きかけ方

本単元で、子どもたちは、前段の第1～5時でスキットを作る学習を行い、後段の第6～8時で、前段での学びを生かして台北教育大学実習生とインターネット交流を行う。

そこで、第1～5時では、テレビ番組スキットを作ることに目的をもたせ、ゲーム活動や文字を書く活動、スキット作りを通して英語を身に付けさせるための働きかけを行った。

また、第6～8時では、台北教育大学実習生と楽しいインターネット交流をすることを目的にもたせ、会話の仕方をペアやグループで話し合ったり試行してみたりする活動を通して、英語を用いたやりとりをすることができるための働きかけを行った。

(3) 実際

(3-a) 単元の目標

⁸ この議論についての詳細は、小学校における外国語科にはあまり関わってこないことがないので、別の機会に委ねることとする。Bolinger (1977), Goldberg (1995), Lakoff (1987), Langacker (2008), Lindner (1982) 等を参照のこと。

- ・自分の特技を伝えようとしたり、相手の特技を理解しようとしたりする。
- ・互いに理解を深めることを目的として、工夫しながら相手に伝えたり相手を理解したりすることができる。
- ・法助動詞 *can* を用いた文の日本語と英語の語順の違いや *can* の意味を理解することができる。

(3-b) 本時の目標

特技を話題として、相手に感想を伝えたり相手に質問したりする工夫をしながら、友だちや ALT, JTE, 台北教育大学実習生と英語を用いてコミュニケーションを図ることができる。

(3-c) 本時の展開にあたって

コミュニケーションの図り方を工夫させるために、まず、台北教育大学実習生（相手）とインターネット交流を通して、よい関係を築く（目的）ことを明確にする。そして、前時までの発表形式から、本時では相手との対話形式に場面が変わることに気づかせる。さらに、グループでの学び合いにおいて、場面の違いを比較することを通して、コミュニケーションを工夫する観点である「感想を伝える」「相手のことを質問する」を見出させる。

(3-d) 結果と考察

コミュニケーションの相手や目的を「台北教育大学実習生と楽しくインターネット交流をする」と明確に設定したことで、子どもがコミュニケーションへの意欲をもち、目的達成に向けた問題解決的な学びを展開することができた。

意図的・効果的な働きかけにより、学び合う活動を通してコミュニケーションを工夫する観点である「感想を伝える」「相手のことを質問する」を見出させたり、観点をういて実際にコミュニケーションを工夫させたりすることができた。

5. むすび

以上、見てきたように、小学校における外国語科は、学校で学ぶ他教科等の学びの中で適切なカリキュラム・マネジメントを行い、さらに、その前に経験した外国語活動の成果を生かし、中学校以降の学びや将来社会で求められる資質・能力が適切に育成されるよう、構造化して体系的にカリキュラムを組み、実践を行うことの必要性を論じてきた。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman, London.
- Byram, Michael (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters, Clevedon.
- Byram, Michael (2008) *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters, Clevedon.
- Byram, Michael, Adam Nichols and David Stevens (eds.) (2001) *Developing Intercultural Competence in Practice*. Multilingual Matters, Clevedon.
- Canale, Michael and Merrill Swain (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing," *Applied Linguistics* 1, 1-47.

- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, Chicago.
- Hymes, Dell (1972) "On Communicative Competence." In J. B. Pride and J. Holmes (eds.) *Sociolinguistics: Selected Readings*. Penguin Books, Harmondsworth.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.
- Lindner, Susan (1982) "What Goes Up Doesn't Necessarily Come Down: The Ins and Outs of Opposites," *CLS* 18, 305-23.
- Saussure, Ferdinand de (1972) *Cours de linguistique générale*. Payot, Paris.
- 鹿児島大学教育学部附属小学校 (2017) 『個の確立を目指す授業の創造Ⅴ: 各教科等の特質に応じた深い学びの実現』
(研究公開資料)
- 田村学 (2017) 『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社, 東京.
- 文部科学省 (2009) 『小学校学習指導要領』第4版, 文部科学省, 東京書籍.
- 文部科学省 (2016) 「教育課程部会小学校部会資料 3-2: 総則・評価特別部会, 小学校部会, 中学校部会, 高等学校部会 参考資料 (整理中)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/07/07/1373891_3_2_1.pdf (2017 年 9 月 11 日アクセス).
- Collins English Dictionary <<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english>>